

塩本 祐介さん (東荒神区)

第42回県民文芸賞 小説部門 1席

「桂馬と王様・王女様」



5回目の挑戦で見事頂点に

8月から9月にかけて開催された「第42回県民文芸賞」。県民の文学的才能の育成と地域文化振興を目的に、県芸術文化祭の一環として行われており、小説・現代詩・短歌・川柳などの7部門に分かれ、計416人から421点もの作品が寄せられた。16人から応募があった小説部門で、見事1席に輝いたのは塩本祐介さん。

これまでに、九州芸術祭文学賞の熊本地区1席や有明新報社の文芸賞の最優秀賞を7度も受賞するなど数多くの受賞歴を持つ塩本さんは、県民文芸賞5回目の挑戦で頂点に輝いた。

自分の気持ちや想いを表現

塩本さんが、小説を書き始めたのは15年ほど前。幼いころから本が好きだったというわけでもなく、世の中に向けて表現できたらと何気なく書き始めていたという。

今回応募した作品のタイトルは「桂馬と王様・王女様」。水産加工品の製造・販売を営む主人公と妻、体

が不自由な義父の日常を描いたものである。書き上げた作品を改めて見返した塩本さんは、「何か殺伐としていないな」と感じたそうだが、型にはまらないスタイルが審査員の心に響いたのかもしれない。

毎回、作品を書き上げたときは、賞を取れるという自信が半分と不安な気持ちで半分と話す塩本さん。今回の県民文芸賞1席が決まったときは、「うれしい限りです。喜びよりもやっと取れたという安心した気持ちの方が強かったですね。何よりも、受賞したあとの周囲の反応にびっくりしました」と反響の大きさに驚いたという。

一生涯熱中できるもの

これからの展望を塩本さんは、「私にとって小説を書くことは、趣味とは違います。作品を書き上げて応募し、他の作品と比較してもらうことで、一生涯熱中して戦える場所が見つかったなという感覚です。これからもできる限り書き続けて自分を表現していきたいです」と、今後も自分の表現で、読む人の心を動かしていくことだろう。